キャラクター名
柏木 悠（かしわぎ ゆう）

プレイヤー名

シンドローム	バロール バロール	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	なし
オプショナル		年齢	33	性別	女性
覚醒	渇望	衝動	恐怖	初期侵食率	34 %
出自	天涯孤独	経験	裏切った	邂逅	ビジネス

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	1	0			1
感覚	2	0	0			2
精神	4	0	0			4
社会	2	0	0			2

HP	26
行動値	8
(非装備時)	8
戦闘移動	13
全力移動	26

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	1		射撃			ＲＣ	6		交渉		
回避	1		知覚			意志			調達	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

カワサキ Z900RS	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
複製体【バランスブレイクlv1】	P	N		
秋桐 廻	P 同情	N 不安		
近浪 □	P 同情	N 隔意		
相沢 太陽	P 庇護	N 憐憫		
草加 薫	P 同情	N 無関心		
萬壽 航	P 遺志	N 猜疑心		
リヴァイアサン	P 執着	N 隔意		

最大財産P: 6	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
空間圧縮	1	2	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	視界	単体	自動	-	
効果：対象は戦闘移動を行う シナリオlv回								
赤方偏移世界	4	2	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	視界	単体	自動	-	
効果：対象の行動値+lv*2 移動距離+10m								
コズミックインフレーション	1	2	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	-	範囲（選択）	-	ピュア	
効果：対象を範囲(選択)に変更 シナリオlv回								
セットバック	1	2	ｵｰﾄ	至近	自身	自動	-	
効果：暴走以外のバステlv個回復 ラウンド1回								
時の棺	1	10	ｵｰﾄ	視界	単体	自動	100	
効果：敵の判定は【理不尽にも】吹き飛んだ								
死神の瞳	5	3	ﾒｼﾞｬｰ	視界	単体	RC	-	
効果：対象にダメージ発生時,追加[lv+2]Dダメージ								
停滞空間	1	5	ﾒｼﾞｬｰ	視界	単体	ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ	-	
効果：対象の行動値0 マイナー使用で解除可能								
コンセントレイト	2	2	ﾒｼﾞｬｰ	-	-	ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ	-	
効果：いつもの								
ディメンジョンゲート	★	3	ﾒｼﾞｬｰ	至近	-	自動	-	
効果：インチキ移動イージーエフェクト								
帝王の時間	★	-	ﾒｼﾞｬｰ	至近	自身	自動	-	
効果：周囲の時間をゆっくりにする								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

目が覚めた時には青白い壁と白いベッド、そして大きなモニターのある部屋だった。両手はどうやら後ろに縛られているようだ。あまり身動きが取れそうにない。頭の中に声が響き続ける。
「逃げて、早くここから逃げなさい」
それが今目の前にいる髭を口元に蓄えた眼鏡の中年男性のものではないことは容易に理解できた。声質は低いものの、頭に響く声は明らかに女性のものなのだ。髭の男は私の顔を覗き込み、何かに満足したかのように頷いた。そして近くの作業台から、拳銃型の注射器をひょいと拾い上げ、私を見やる。この男が何をするのか理解出来なかったが、私の頭に警鐘を鳴らすのには十分すぎる状況であった。背中にじわりと汗が滲む。男は乱暴に私の肩を掴み、首筋に手を置いた。恐怖で叫ぼうにも、何故か声が出ない。まるで発生の仕方を忘れてしまったかのように、否、生まれてから一度も声を発したことがないかのように、何も叫ぶことが出来ないのだ。
男の持った注射器の針が私の首筋にあてがわれるその刹那
「ぐわっ…なんだ貴様は…」
男が怒声と共に弾かれ、地面に倒れ伏す。みやるとそこには、フルフェイスのヘルメットで顔を覆った白い戦隊モノのスーツのような服装の者がそこに立っていた。一体いつのまにそこにいたのであろうか。
「どうして動かなかったの？あなたなら出来るはずよ」
その声に私はハッとする。ヘルメットから発されたであろうその声は、私の頭の中に響いたあの声と全く同じなのだ。女は懐からナイフのようなものを取り出し、私の後ろ手の鎖をいとも容易く断ち切る。あなたは何者なのか、ここはどこでこの施設はなんなのか。聞きたいことは山のようにあったが喉から溢れるのは未だに掠れた声にもならない音のみだった。
「色々と聞きたいことはあるでしょうけれど、私はあなたの敵じゃない。それだけは信用して。」
そう言いながら彼女はヘルメットのフェイスシールドを跳ね上げた。
「あ…」
初めて声が出た。そして理解する。未だに鏡を見ていないがわかってしまう。彼女は私と同じ顔をしているということを。自分から漏れた声も、最早聞き慣れてきた彼女の声と同じである。
「逃げましょう。あなたなら1人でもこの施設を出られるはず。私は他の私を探す。いい？ゲートを繋ぐのよ。行き先はここ…この研究室に『萬壽